

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 6-8

子どもの中の民主主義

目次

はじめに	2
要約	4
1. 話し合いの持ち方	6
●学級会への参加態度	6
●子どもにまかせることの意味	11
2. 「代表」に対する意識	15
●代表の決め方	15
●「代表」に対する意識	19
3. 民主的態度—集団のかかわりの中で—	24
●民主的意識	24
●問題場面での対応	27
4. まとめ	31
●社会をみる眼	31
まとめに代えて	33
シリーズ/講座・子ども調査入門 ⑩	深谷昌志
調査しにくい項目について	34
資料1 調査票見本	38
資料2 学年・性別集計表	48

◆はじめに◆◆◆◆◆

今なぜ民主主義なのか

放送大学教授 深谷昌志

なつかしのアメリカン・デモクラシー

昭和8年生まれなので、小学6年の時に敗戦を迎えた。そして、何行かを墨でぬった教科書、それから新聞のようなタブロイド版の紙を何枚かずつもらい、自分で折って教科書に使った時期、さらに、何分冊に分けてもらったものを自分で製本した教科書の時期などを経て、まがりなりにも一冊にまとまった教科書を手にするようになった。

それだけにそのころの教科書をよくおぼえているが、その中でも『民主主義』が印象に残っている。清水昆のマンガが入っているだけでもユニークな教科書だが、書かれている内容も格調高いものであった。

書庫の中を探し、『民主主義』を読み直してみた。一人ひとりの意見をだいじにするところから民主主義が始まる。そして、ひとりの尊厳という意味で、性差にこだわってはいけない。あるいは、多数決があるからといって少数の意見も忘れることなく耳を傾けるようになど、民主主義のABCが平易に説かれており、戦後教育の原点をふまえた名著という印象を受けた。

こうしたテキストに限らず、敗戦直後の日本で、民主主義という言葉は、希望にみちあふれた新鮮な響きを持つものであった。「皆

の者、この紋どころが目に入らぬか。控えおろう」のパターンですべてが終わるテレビドラマがあるが、当時の社会で民主主義は、みんなが信じ、望みを託した錦の御旗であった。

たしかに、食べものはなく、着るものも不足し、ないないづくしの社会だった。当時の川柳に「6・3制、野球ばかりがうまくなり」があるが、その野球も、たこ糸を固くぐるぐるとまいたものにクロスを縫ったのがボール。そして、木の枝の形をととのえたものがバット、綿を入れて大きな手袋を作ったのがグローブという時代である。しかし、それにもかかわらず、未来に希望があって、元気に子ども時代を暮らしていた感じがする。

ラジオから、平川唯一の「カム・カム・エブリボデイ」で始まる英会話の声が聞こえてくる。その声に、おとも子どもも耳を傾け、ごく素朴に、英語を覚えてアメリカ文化に近づこうとした。最近廃刊になった『リーダーズ・ダイジェスト』が、そうしたあこがれのアメリカを手近に伝達してくれる雑誌として高い人気を保っていたのを思いおこす。リーダーズの発売日だからと、朝早くから列を作っていたのも、輝けるアメリカに少しでも早くふれたいという気持ちのあらわれだったので

あろう。

そうした現象を重ね合わせていくと、敗戦直後の「民主主義」とは、アメリカン・デモクラシーだったように思われてくる。そして、筆者も含めて、昭和一けたの後半から昭和10

年前半の世代の人では、自由と平等をなによりもだいじな基本原理として成長してきた。それだけに、今もってデモクラシーという言葉に、汚れを知らない初恋にも似た感傷がついてまわる。

民主主義慣れのこわさ

しかし、戦後40年を過ぎて、人々の心に民主主義慣れが生じているように思う。特に子どもたちは、生まれてこのかた、民主社会の中で育ってきた。そのため、一人ひとりがだいにされる。あるいは、みんなの中から代表を選ぶ、自由に自分の気持ちを話す、などについて、あたりまえと思う感覚が広がっている。というより、民主主義は、空気や水と同じようにありふれたもので、むしろ、民主主義に逆ったほうがモダンなようにも感じられてくる。

民主主義とは本来、崩れやすいもので、人人が守ろうと努力して初めて成り立つ制度であろう。アジアを含めて、世界の国々の中で民主的な政治体制を持つ国が少ないのも、民主主義を持続させるのがいかにむずかしいのかを示す例証となろう。それでも、現代のおとなたちは、程度の差こそあれ、民主主義のありがたさを感じて育ってきた。しかし子どもたちは、ありがたみを知らないから、民主主義を守る態度に欠ける。そうした子どもたちが社会の担い手になった時、彼らは、民主主義を守りぬいていけるのであろうか。

ワイマール体制下のドイツで、権力を束縛されるのを求める気運が広がって、ナチズムの台頭を招いたとき。つまり、民主主義を崩すのはけっして専制タイプの政治家でなく、そうしたタイプの政治を求める人々の気持ちであろう。ナチズムを支えたのが「心の内なるヒットラー」であったのと同じように、子どもたちの間に民主主義を軽視する態度が広

がってくれば、民主的な仕組みは内部から崩壊していく。

このところ、中学や高校の生徒会で、役員になり手がなく、あるいは話し合いの時間になるとしらける、などと耳にすることが多い。そうした現象を手がかりにすると、子どもたちが民主主義慣れ、あるいは民主主義にあき、民主主義離れをしているような印象を受ける。そこで、子どもの心の中に、民主主義がどうかたちで根づいているのかを確かめてみたいと思った。

もちろん、子どもたちは未成年であるから、直接的に選挙についての気持ちや政党支持の態度をたずねても、有効性を発揮できまい。そこで、この調査では、民主主義を子どもの身の回りにひきよせ、友だちや学級の中で、民主的な原理がどの程度定着しているのかをとらえようとした。具体的には、

1. 学校での話し合い活動がどのように行われているか
2. クラス代表に対する意識はどうであるか
3. 集団と個とのかわり方はどうであるかの3点について考察を加えてみることにした。

子どもの成長につれて背の高さが変わっていくように、民主主義についてのふれ合いも、子ども、中学生、高校生と、年齢が上がるにつれて変わってこよう。そうした意味で、民主主義の基盤ともいえるべき、子どもにとっての民主主義をとらえようとしたのが、本報告書である。

調査レポート／子どもの中の民主主義

要約



① クラスのことは自分たちで決めたい

クラスの話し合いは週に1回程度あり(図1)、楽しいとは思わないが(図4)、先生が決めるより、自分のことは自分たちで決めたい。(図2・図7)



② 自分たちで座席も決めたいと思う

具体的に自分たちで決めたいのは、班長やクラスの代表、座席、係の仕事などである。(図7)



③ 代表を選ぶ時はまとめる力のある子を選ぶ

代表としては、なによりも、まとめる力があり、そして親切な子を選びたい。(図12)



④ 代表は役に立てると思うが、忙しそう

代表になってもよい子は37%で、あまりなりたくない子が54%と過半数を占める(図13)。そのさい代表になれば、人の役に立てそうだが(図16)、忙しそうで文句をいわれそうな不安(図14)が、代表になりたくない気持ちを強めている。

調査概要

1. 調査主題 子どもの中の民主主義
2. 調査視点 民主主義社会の中で生まれ育った子どもたちの中には民主的な原理はどの程度定着して

いるのか。友だち、クラスなどを通して、子どもにとっての民主主義をとらえる。

3. 調査項目 クラスのことをだれが決めるか/学級会の話し合いのようすについて/クラス代表を決める時の基準について/問題場面での行動につい

放送大学教授 深谷昌志

東京都目黒区立菅刈小学校教諭 土橋 稔

⑤代表になったことのある子は48%

クラスの代表になったことのある子は、1～2回の36%を含めて48%で、52%の子はそうした体験を持っていない。(図9) なお、代表になったことのある子は、代表の持つ意味のだじさを理解できるようになる。(表3)



⑥さしずを受けたくないが、決まったことはやる

さしずを受けるのは嫌いだが、決まったことはやるつもりだ。(図19)



<全体として>

自分たちのことは自分たちで決めるつもり、という態度は定着しているし、リーダーを選ぶ目もかなりしっかりしている。しかし、話し合う機会はそれほど多くないし、代表になる機会も少ない。そうした意味で、民主主義を実践する場が、学級の中にもう少し多くあってほしいと思う。



て/世の中に対する評価について/これからの日本についてなど。

- 4.調査時期 1986年5～6月
- 5.調査対象 東京・千葉・神奈川の小学5、6年生
- 6.調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
5年	329	305	634
6年	413	413	826
計	742	718	1,460

1. 話し合いのもち方



学校では折りあるごとに、学級を単位にさまざまな話し合いが行われることが多い。学芸会の配役や臨海学園の班編成、そして部活動の分担についてなどがその一例であろう。そこで、そういった話し合いが1年間にどれくらい持たれているのかをたずねたのが、次の図1である。

これによると、1週間に1回か、またはそれ以上話し合いをもったというクラスが全体

の約5割を占め、月に2～3回というクラスも含めると約8割にもなることがわかる。実際には、朝の会を利用した短い話し合い等があるだろうから、学校では、子どもたちが気づいていなくとも、もっと多くの「話し合いの場」が設定されていると考えられる。

ではその話し合いについて、特に学級会についてどういう運営がなされているか、少し詳しく見ていくことにしたい。

学級会への参加態度

まず最初に、子ども自身は、学級会をどう評価しているのでしょうか。図2によると、「学級会でいろいろ話し合ってもムダなことが多いので、先生に決めてほしい」という考えについて「あまりそう思わない」または「ぜんぜんそう思わない」と答えた児童は全体の

7割以上おり、逆に「クラスの問題はみんなですべて話し合えば、解決することが多い」という考えについて、賛成している児童は全体の8割にも及ぶ。したがって、学級会への評価は表面的なさめた態度とは別に、かなり高いということができよう。

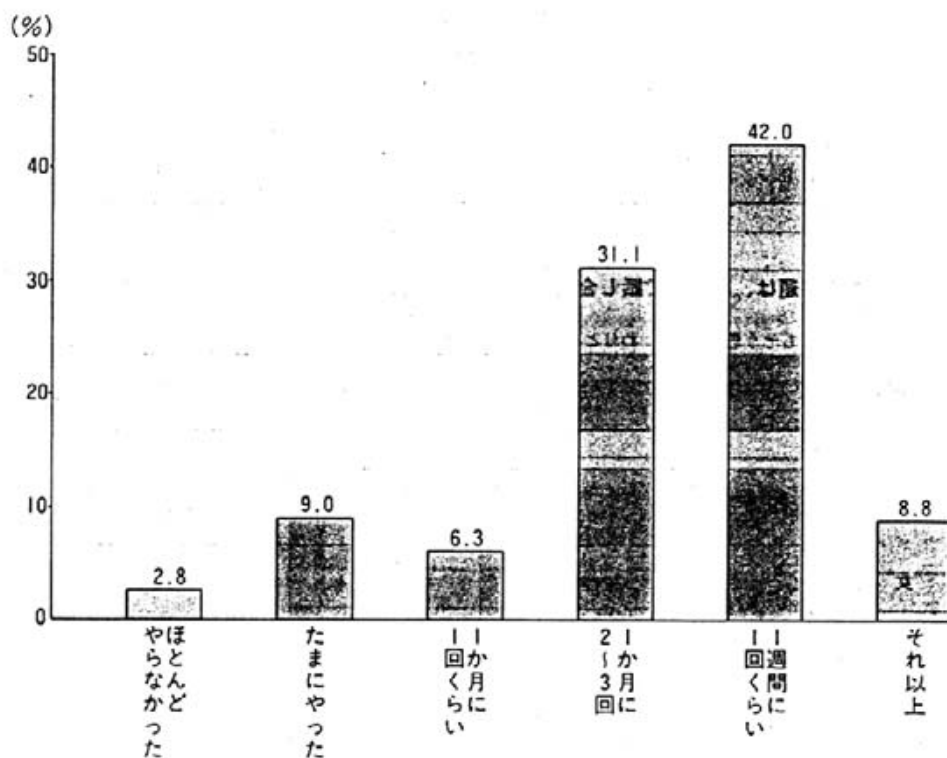
それでは、そのような学級会に、子どもたちはどんな態度で参加しているのだろうか（図3）。

「いつもそう」または「わりとそう」と答えた者の割合に着目すると、「決まったことは協力して実行する」と答えた者が全体の約半分、また、「協力して話し合いが進む」（43%）「意見がたくさん出る」（41%）と答えてはいるものの、しかし、「いつも発言する者はだいたい決まっており」（67%）「先生がいなくてふざける人がある」（56%）「発言しないでおしゃべりしている」（34%）というように、全体としては学級会への参加態度があやふやで、どちらかというときあまりまじめな態度では参加していない雰囲気がかんてくる。

したがって、図4を見ると、「学級会は楽しい」という考えについて、「あまりそう思わない」か「ぜんぜんそう思わない」と答えた児童は、全体の4割に達する。積極的に参加し、自らの意見を言うような児童にとっては、学級会は楽しい時間だが、そうでない場合にはたいくつな時間なのであろうか。いずれにしても、学級会が有意義な時間としては組織されていないことがわかる。

このことは、次の図5を見ても明らかである。これは「学級会で1人の人が反対してなかなか話し合いが進まない場合、どう思うか」という「少数意見の尊重」についてたずねたものである。「1人だけの反対なので、多数決で決めてしまったほうがいい」という考えについて、賛成の意を示した者が、全体の約

図1 クラスの話し合いの回数



6割近くを占める一方、「時間がかかっても、その子がわかるまで話し合いをしたほうがいい」という考えについて、賛成した者もほぼ同数に及ぶ。限られた時間の中で、ある結論を出さなければならない場合も多いだろうが、民主主義の基本であるはずの「少数意見の尊重」や「討論と説得」について、そうしたことはだいたいと思いつつも、そうきれいごととは言ってられない。早く多数決で決めたほうがいいというような迷いが浮かんでくる。

子どもにとって学級会は、意識の上では大

切な時間、必要な時間とは考えられているが、しかし、それほど楽しい時間ではないらしい。

次の表1は学級会の議題について自由に書いてもらったものの一部である。5年と6年との間で、学級会の議題についての差は見られないが「係を決める」や「なにかのだしものを決める」などが多くを占め、多少のマンネリが感じられる。実際、現場でも担任が学級会の議題をどうするかで悩むという話をよく聞く。学級会を活性化するために、議題のあり方をもう一度見直す必要があるだろう。

図2 学級会の評価

① 学級会でいろいろ話し合ってもムダなことが多いので、先生にきめてほしい

	とても そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
全体	3.7 8.2	17.3		44.7	26.1
男子	4.9 9.4	19.0		38.1	28.6
女子	2.5 7.0	15.6		51.4	23.5

② クラスの問題は、みんなで話し合えば解決することが多い

	とても そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
全体	18.4	33.2	29.1	14.7	4.6
男子	20.5	34.4	25.2	14.0	5.9
女子	16	32.2	33.1	15.4	3.2

図3 学級会での話し合いの雰囲気

	(%)			
	いつもそう	わりとそう	たまにそう	あまりそうでない + ぜんぜんそうでない
① 発言者がきまっている	21.4	45.7	14.5	18.4
② 先生がいないとふざける 人がある	20.7	35.1	27.0	17.3
③ 決まったことは協力して 実行する	12.1	43.0	25.5	19.4
④ 協力して話し合いが進む	8.0	35.4	29.6	27.0
⑤ 意見がたくさん出る	8.2	32.6	25.6	33.6
⑥ すぐ多数決であっさりき まる	10.3	28.3	27.2	34.2
⑦ きまりを作ることが多い	6.4	29.3	32.5	31.8
⑧ おしゃべりが多い	10.5	23.3	36.8	29.4
⑨ 意見が分かれてなかなか きまらない	9.4	24.2	46.2	20.2
⑩ 男女で意見が分かれる	6.6	16.4	29.7	47.3
⑪ ふざけて発言する人が多 い	4.4	14.6	30.1	50.9
⑫ 意見をおしつける人がい る	3.3	13.6	24.6	57.7
⑬ 先生がひとりでしゃべっ ている	3.9	10.5	82.3	

図4 学級会は楽しいか

	(%)				
	とても そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	あまり そう 思わない	ぜんぜん そう 思わない
全体	11.9	19.9	27.4	27.3	13.5
男子	14.0	19.2	24.5	25.3	17.0
女子	9.7	20.7	30.4	29.4	9.8

図5 学級会で1人の子が反対、話し合いがすすまない時

① 1人だけの反対なので、多数決できめてしまったほうがいい

	(%)			
	とても そう 思う	わりと そう 思う	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない
全体	17.4	39.0	36.7	6.9
男子	21.0	36.3	34.9	7.7
女子	13.5	41.9	38.5	6.1

② 時間がかかっても、その子がわかるまで話し合いをしたほうがいい

	(%)			
	とても そう 思う	わりと そう 思う	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない
全体	18.3	36.6	33.6	10.9
男子	19.9	36.4	29.8	13.9
女子	17.8	36.8	37.5	7.9

表1 学級会できめたこと

5 年	6 年
<ul style="list-style-type: none"> ○仲間はずれをしない ○スポーツ会 ○プレゼント ○委員会きめ ○係きめ ○班替え ○代表委員きめ ○班新聞コンクール ○球技大会 ○赤白きめ ○校庭の使い方 ○お楽しみ会 ○おわかれ会 ○雨の日のきまり ○給食 ○サッカー大会 ○マラソン大会 ○体育館の遊びのわりあて ○バスケット大会 ○マンガをもってきてよいか ○ソフトボール大会 ○代表委員の報告 ○うんどう会のきまり ○クラス目標 ○日直の仕事 ○うるさくなったらどうするか ○意見を言わなかったらどうするか ○集会でやりたいこと 	<ul style="list-style-type: none"> ○係きめ ○スポーツ大会 ○6年生を送る会の出しもの ○教室内の掲示 ○雨の日の遊び方 ○運動会の目当て ○七夕集会 ○学級目標 ○席がえ ○遠足の班きめ ○委員会の決定 ○子ども緑日の出しもの ○ボールの使い方 ○廊下歩行について ○お別れ会 ○クラスのきまり ○お楽しみ会 ○スポーツ大会 ○おかわりのしかた ○代表委員の決定 ○忘れ物 ○校庭の使い方 ○おしゃべりを減らす方法 ○学級マーク ○学級歌 ○そうじをきちんとやるにはどうするか

子どもにまかせることの意味

次の図6は、クラスのことをだれが決めているかをたずねたものである。これによると、班長やクラスの代表など、かなりの割合で子

ども自らが決めていることがわかるが、その一方で、学級目標や日直の仕事など、もっと子どもの手に委ねてもいいと感じられるもの

を担任が決めている場合が多いことがわかる。

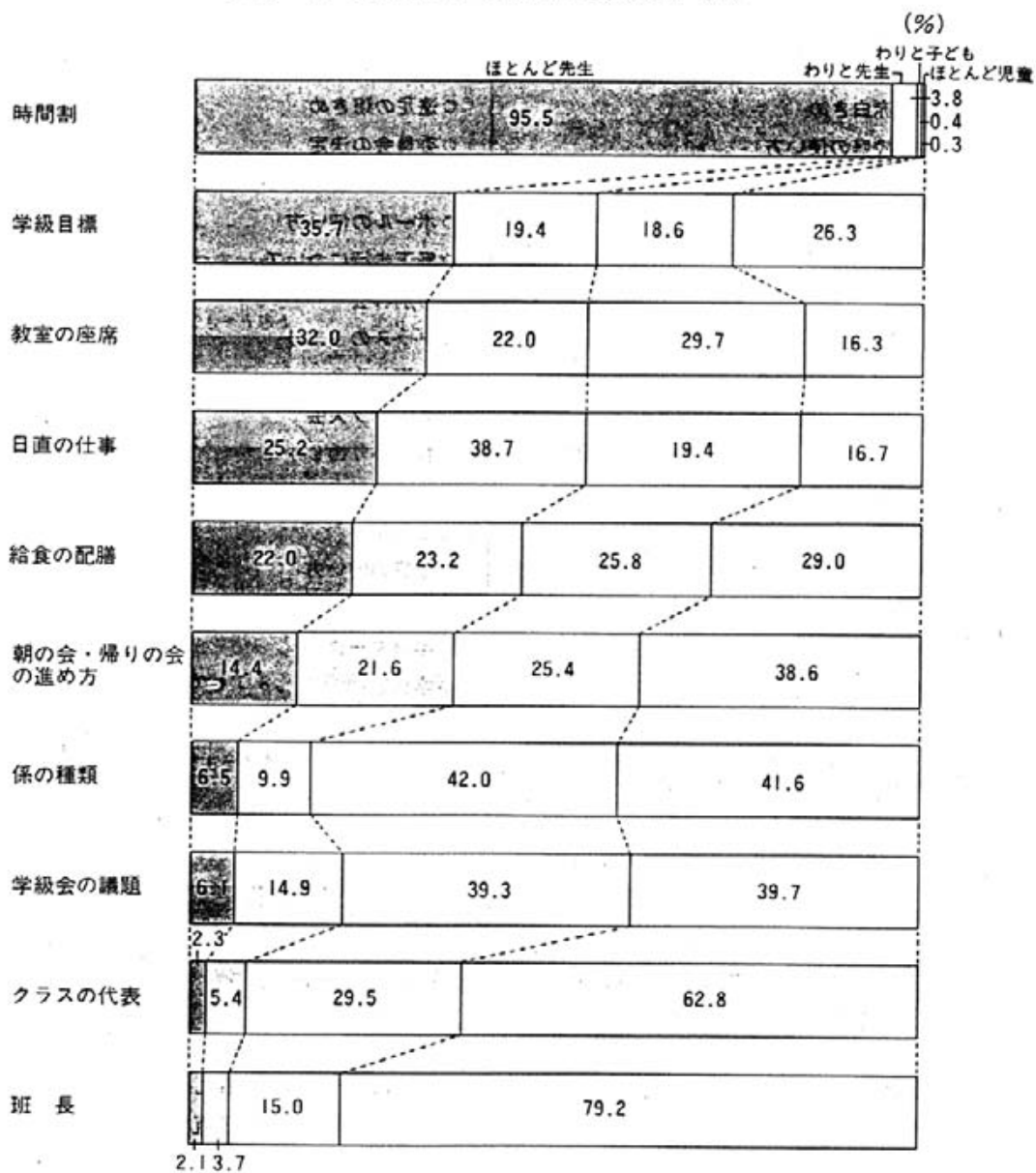
さらに、次の図7は「クラスのことを誰が決めたらいいと思うか」について実際の姿と対比させて示したものである。

両方の折れ線を比べてみると、「教室の座席」を除いては、現状と子どもの希望とが比較的近いことがわかる。子どもたちとしては、自分たちの意見でだいたいのは決めてい

るが、座席の決め方はもっと自分たちの意見で決めたいという。

ここで、「教室の座席」「給食の配膳の仕方」「学級目標」「朝の会や帰りの会の進め方」「日直の仕事の仕方」という5つの項目をキーとし、それらについて「ほとんど子どもが決める」場合を5点とし、順次4点、3点というように得点化して得点合計を出してみた。

図6 クラスのことをだれが決めているか



そして、合計得点の高い者たちのグループ、低いグループの者たち、その間の者たちのグループというように、全体を3つのグループに分けた。

高得点グループは、学級内のいろいろなことについて子どもにまかせることが多いというグループであり、低得点グループは、先生が決めることが多いというグループである。この両者を比較したのが、図8である。

図を見て明らかのように、高得点グループは、当然のことながら、クラス内のことは自分たちで決めたいと思っていることがわかる。先生の手によらずに自分たちで決めるという経験が多い子どもほど、自分たちで決めたいという欲求が強い。

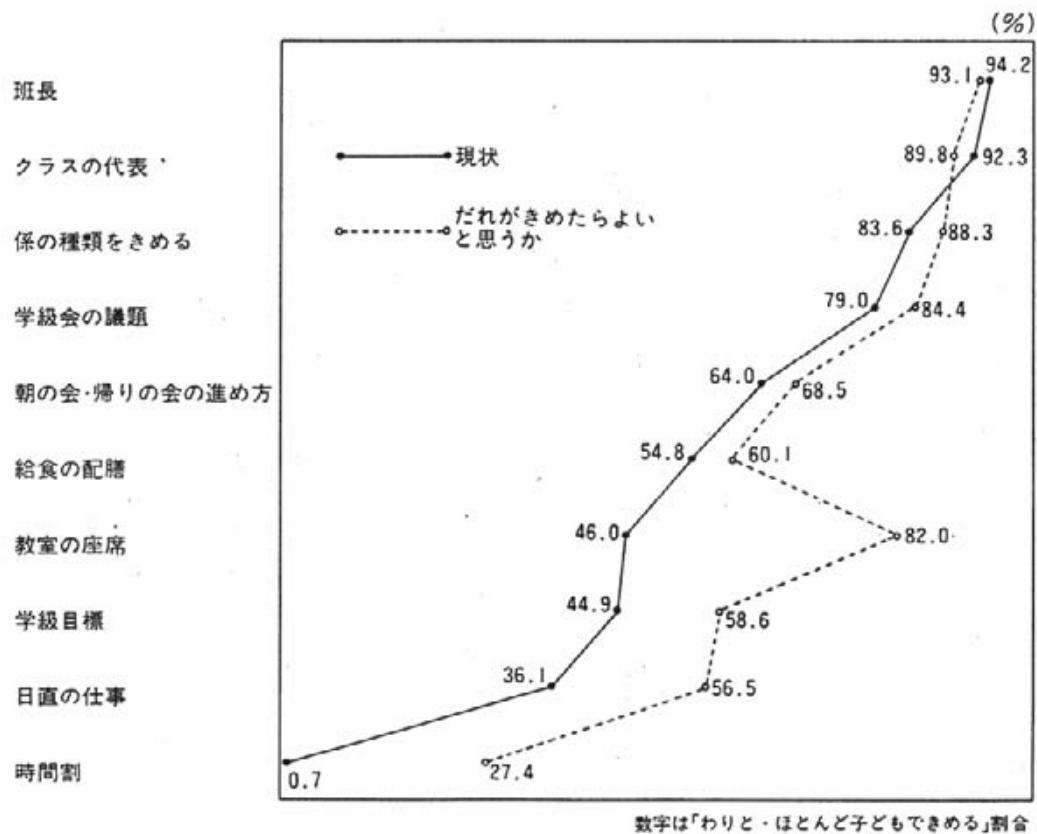
さらに表2をごらんいただきたい。これは

2つのグループで大きな差が出たケースである。

クラスに算数の苦手な子がいて、その子のために授業がなかなか進まないとする。その場合、「苦手な子は家で自分で勉強するようにし、学校の授業は進んでほしい」という考えに対して、「ぜんぜんそう思わない」と答えた者は低得点グループでは9.3%、高得点グループでは20.1%に及ぶ。また、逆に「とてもそう思う」と答えた者は、低得点グループでは19.2%、高得点グループでは11.8%である。

これからすぐに、「子どもたちの主体性を尊重し、学級内のことを子どもに委ねるような雰囲気をもつクラスでは子どもたちの中に仲間をだいじにする態度が育っている」などと結論づけることはできないが、しかし、仲間

図7 クラスのことをだれがきめたらいいか



意識の成立を感じさせるデータのように思える。

では、それ以外の質問項目ではどうだったろうか。

当初の子想では、ふたつのグループでは、

質問に対する反応の仕方に差があるだろうと考えていた。高得点グループの者たちはどちらかと言えば自立しているのではないかと考えていたのである。しかし、ほとんどの質問で大きな有意差は認められなかった。

図8 クラスのことをだれがきめたらいいか(加算点)

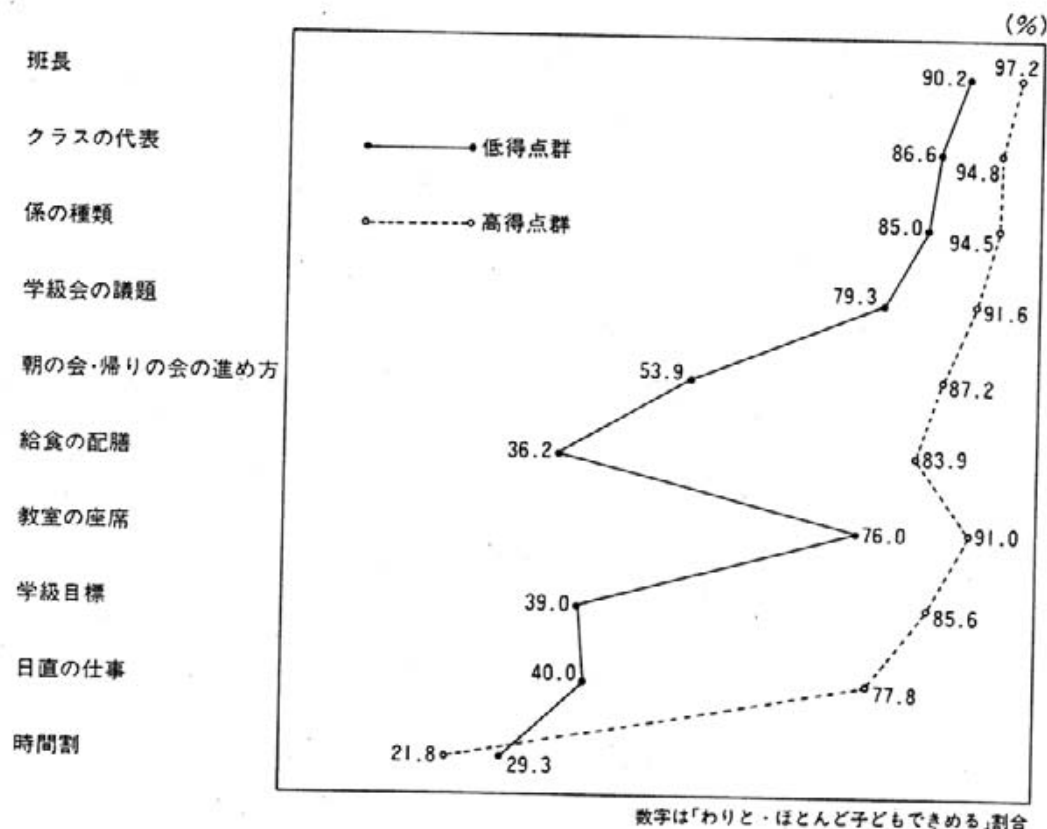


表2 算数のにがてな子のために、授業が進まない場合(加算点)

① にがてな子は家で自分で勉強するようにし、学校の授業は進んでほしい

項目	尺度			
	とてもそう思う	わりとそう思う	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない
低得点群	19.2	30.9	40.6	9.3
中間得点群	13.7	30.8	43.7	11.8
高得点群	11.8	24.7	43.4	20.1

2. 「代表」に対する意識



前章では、話し合いに対する意識を見てきたが、この章では、民主主義のもうひとつの

側面である「代表制」に対する意識を探ってみたいと思う。

代表の決め方

小学校で代表といえば、とりあえずクラスの学級委員（代表委員）や委員会の委員長、運動会のリレーの選手、全校行事の司会などが頭に浮かんでくる。

そこで、そのような代表になった経験があるかどうかをたずねたのが、次の図9である。これによると、何回もあるというものが約1割、1～2回という者が約4割、1度もないという者が約5割に達する。大づかみにして、半数の子が代表になったことがないという事実は、一人ひとりの子に活躍の場を与えるのが、子想以上にむずかしいのを暗示している。

それでは、代表の決め方について、子どもたちはどんな方法がいいと思っているだろう

か。

図10によると、運動会のリレーの選手のような能力差のはっきりしているものは、走る能力の高い者を選ぶ方法がよいと考えている。しかし、②や③の学級の代表や班長の決め方では、「友だちの推薦」が一番いいと考えており（約8割）、勉強のできる人にするという方法をよいと考える児童は、「わりとよい」と考える児童を含めて、およそ5割となる。友だちが推薦し、その子が勉強が得意ならそれもよいし、やっていない子の中から選ぶのもよい。いずれにせよ、学級の代表を選ぶのは自分たちでやりたいし、先生が決めるのは

望ましくないと子どもは考えている。

また、学級の代表より気軽と言える班長の決め方では、やりたい人でじゃんけんをしたり、今までやったことがない人がやるという方法を「とても、またはわりとよい」と考える児童はおよそ5割強いる。これは、未経験者に対して、より経験を積ませてやろうという子どもたちの配慮が感じられる数字である。

いずれにせよ、代表の決め方として、「先生が決める」という方法をよいと考える者が少ないというのは注目に値する。図10の3つの項目とも、先生が決めるのは良くないと思う子の割合は7割前後に達する。それをさらに詳しくみたのが、図11である。「学級委員やいろいろな代表は先生が決めてくれば、

めんどろでなくてよい」という考えについて、「あまり、またはぜんぜんそう思わない」と考える児童はおよそ8割にも及ぶ。子どもたちは自分たちの代表を自らの手で選びたいと考えており、その限りでは、民主的な手続きを子どもたちが信じているように思える。

それでは、友だちの推薦で選ぶとしてもどんな子どもに代表になってもらいたいのだろうか。

次の図12によると、やはり「まとめる力のある子」が重視され、次に「親切な子」を選ぶ子どもも「わりと」を含めるとおよそ9割にも達する。以下、世話好きな子(67%)、勉強のできる子(59%)と続き、リーダーとして頼りになる子を選んでいるのがわかる。

図9 クラス代表になった経験

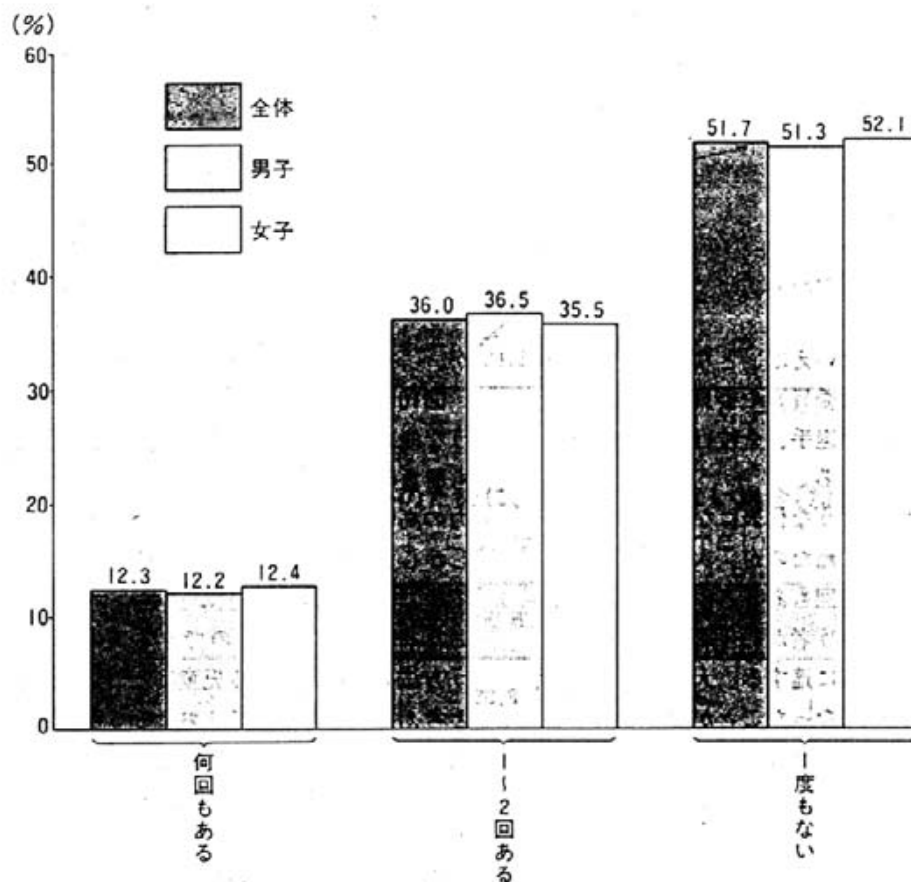


図10 代表をきめるとき、どんなきめ方をしたらいいか

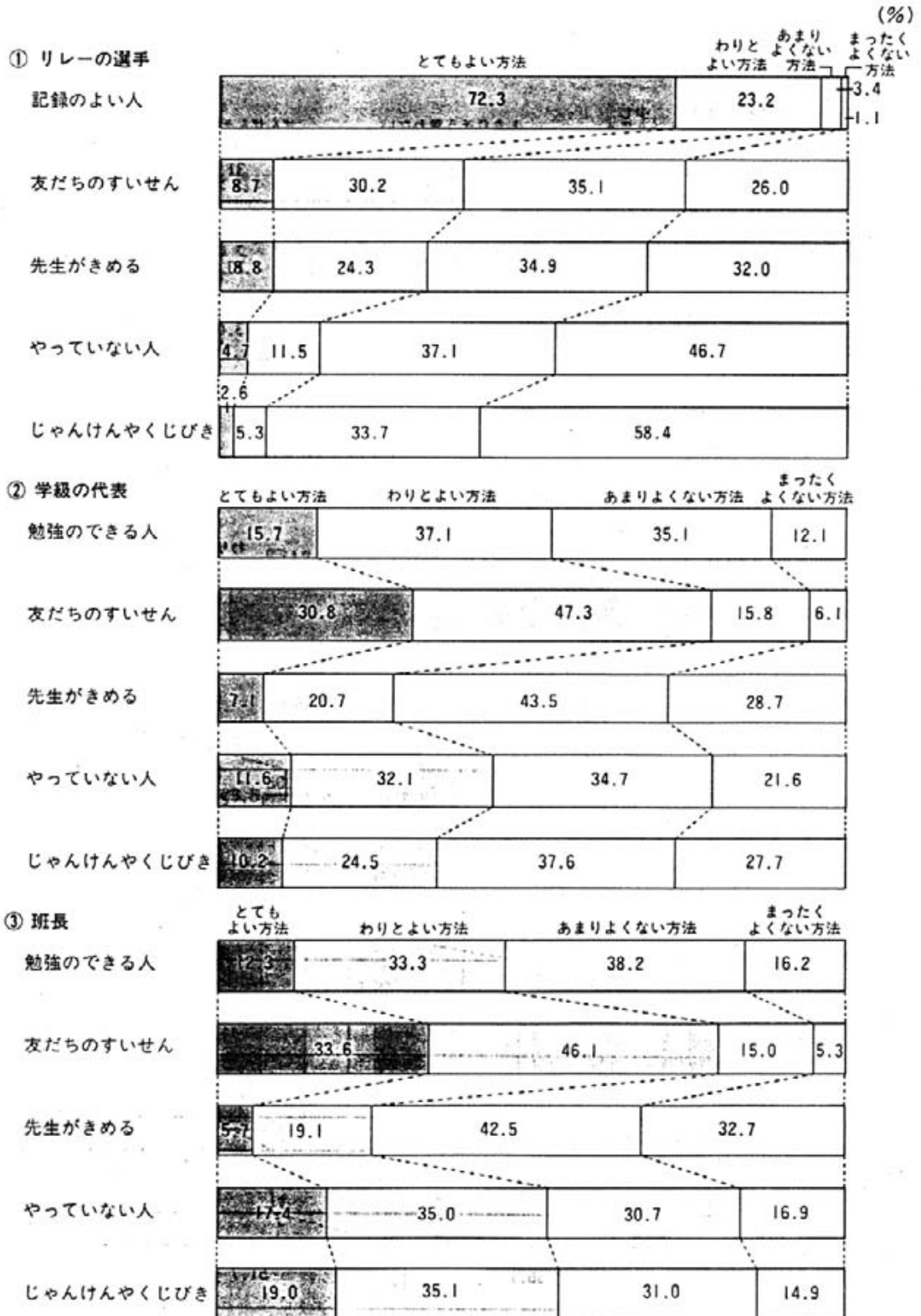


図11 クラスの代表を先生がきめれば面倒でなくてよい

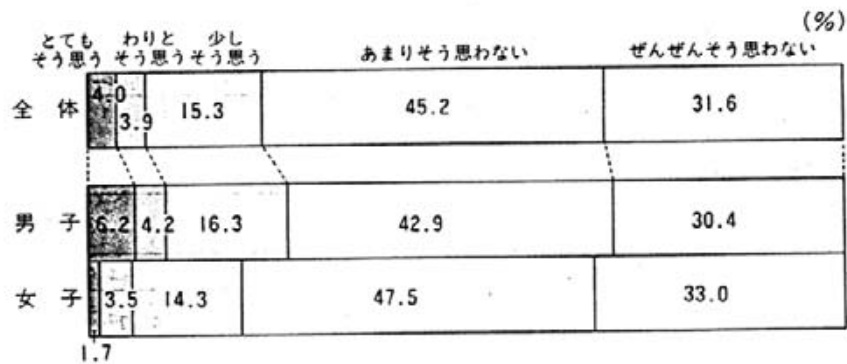
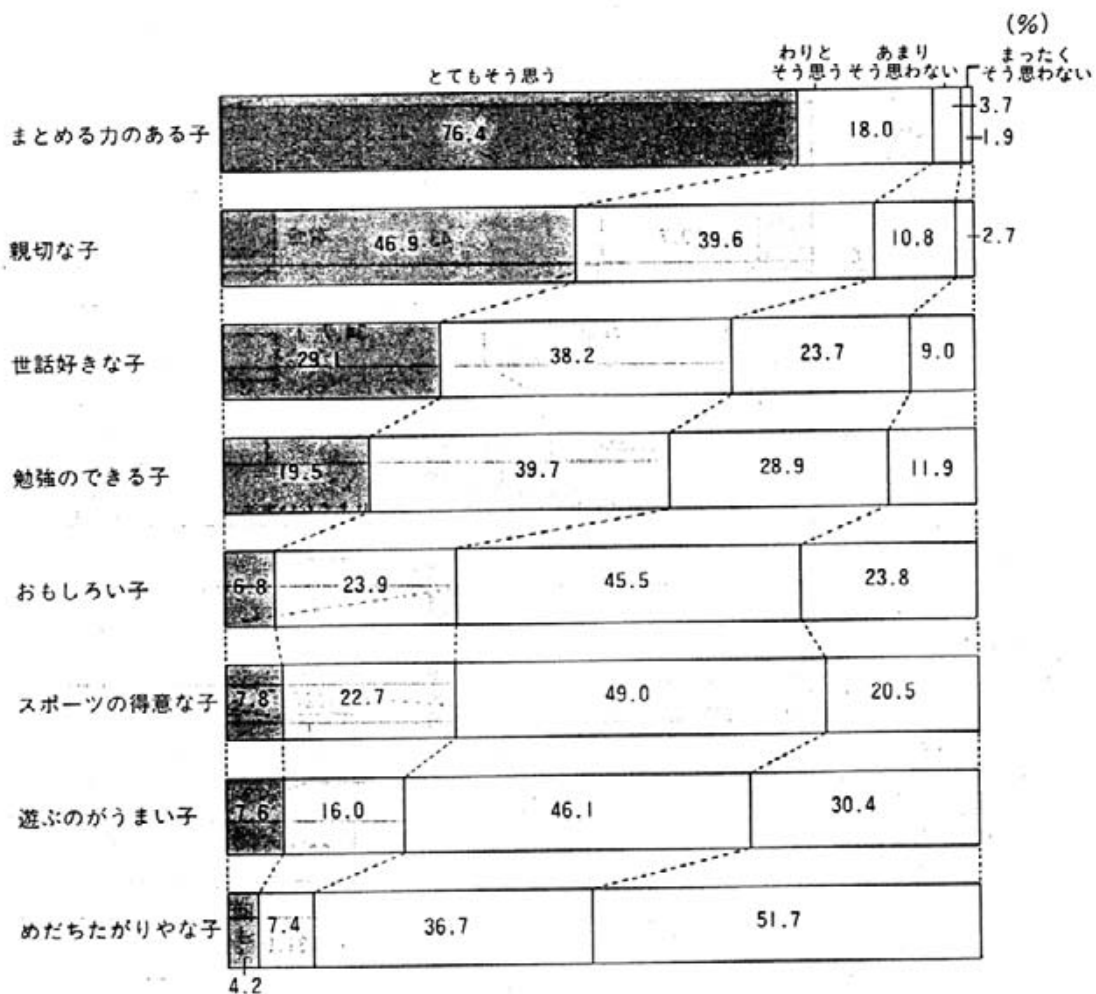


図12 クラス代表をきめるとき、どのような子を選ぶか



「代表」に対する意識

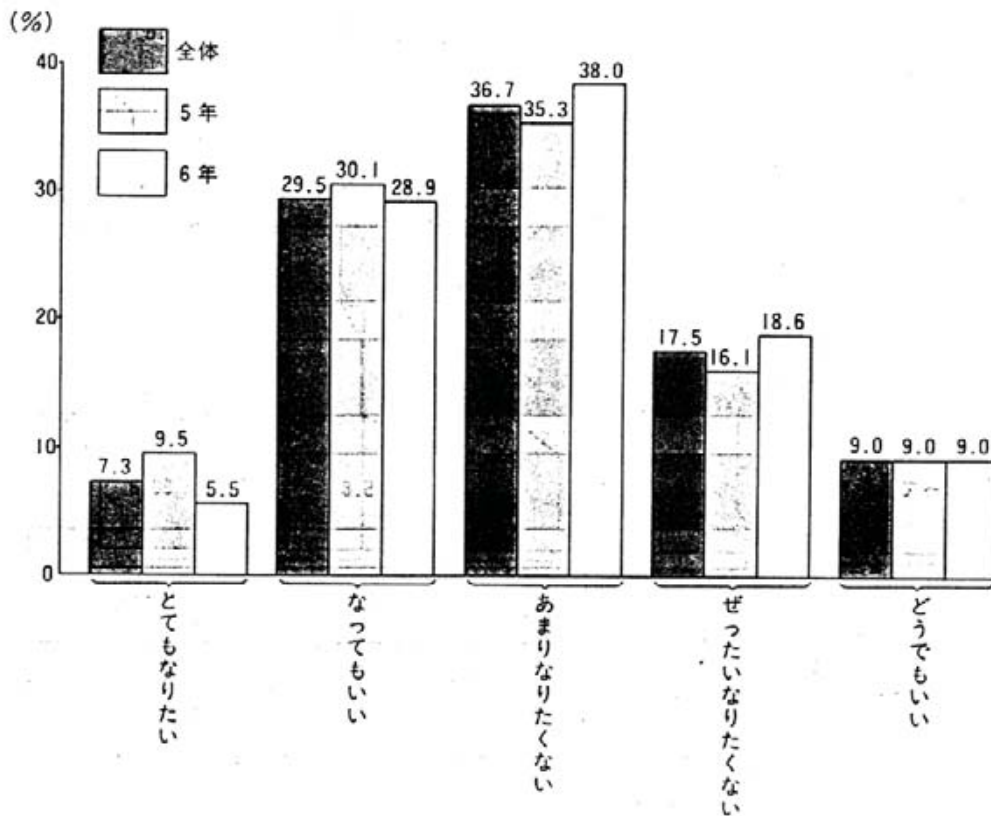
このように、子どもたちが自分たちの代表として、頼りになる子を選びたいと考えていることはわかったが、それでは、自分自身が代表になることをどう考えているのであろうか。

図13によると、「とてもなりたい」と答えている児童はわずか、7%にしかすぎず、なってもいいという児童を含めても全体の4割にも満たない。

そこで、クラスの代表に子どもたちがなりたくないと考えている理由をさぐってみると、「忙しそうだから」と答える児童が77%、以下「文句を言われるから」(64%)、「めんどうくさいから」(59%)、「めだつことが嫌いだから」(56%)となる(図14)。

さらに、それでも推薦されたらどうするかという質問に対して、「一生懸命やる」と答えた者がおよそ半数に達しているものの「し

図13 クラスの代表になりたいか



かたがないからやるが、あまり一生懸命やらない」と答えた者が1割、「いやだと断る」と答えた者が3割以上におよぶ(図15)。

自分たちの代表は自分たちで選びたいが、しかし、自分になることはごめんだと考えており、責任ある立場には立とうとしない姿が浮かんでくる。

その原因はいろいろあるだろうが、そのひとつとして、学級委員などの代表に選ばれることに対する価値が以前と比べて下がったことが挙げられよう。「カッコイイ」と感ずる価値観が多様化したとも言えるし、「一生懸命やる」とか「努力する」とかいうことに対

して、子どもはむしろ「カッコワルイ」と感じているのかもしれない。しかし、図14の中で「文句を言われそう」や「めんどうくさそう」が大きな割合を占めることを手がかりにすると、代表になったことのない子の間に、リーダーになる自信を持ってなくて、なりたくないと答えている者が多いことを感じさせる。

もちろん、そうした一方では、代表になりたいと考えている児童も少なからず認められる。次の図16は、「代表になりたい」と考えている児童に対して、なぜなりたいのかという理由をたずねたものである。「みんなの役に立てるから」(90%)、「やりがいがあるか

図14 クラスの代表になりたくない理由

	(%)			
	とてもそう+わりとそう	少しそう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
忙しそう	50.3	26.4	16.1	7.2
文句を言われるのがいや	41.6	22.2	22.6	13.6
めんどうくさい	37.9	21.0	26.9	14.2
めだつのがきらい	36.1	19.9	26.6	17.4
いい子ぶって見られる	29.6	13.8	25.8	30.8
人の世話がきらい	19.8	16.5	36.1	27.6
勉強に支障	15.7	14.6	34.6	35.1

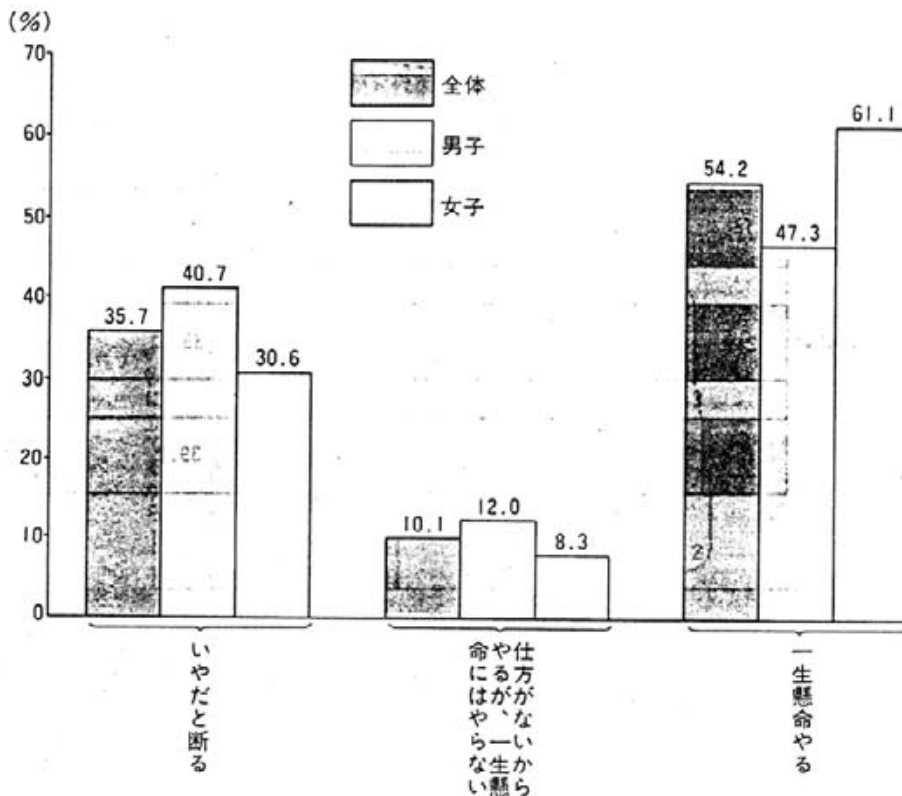
ら」(81%)と考えており、「なんとなくカッコいい」とか「めだてるから」と答えている児童は少なく、真剣に取り組もうとしていることがわかる。

したがって、「みんなの役に立てそう」と考える子は代表になってもよいと思っているのに対し、失敗して文句を言われそうと感じている子は、リーダーになることに尻ごみしている。これらは、一人ひとりの子が、これまでにリーダーになったことがあるかどうかに関連してきそうなので、代表になった経験と子どもの意識との関連を見てみると、表3のような結果が得られる。

これによると、「代表になりたくないのはめんどくさいから」という考えに「とてもそう」と答えた割合は、これまでに1度も代表になったことがない児童が25%と一番高く、1～2回は15%、「何回も」は12%と経験が豊富になるにつれて、その割合が下がっていく。

それに対し、逆に「代表になりたいのはみんなの役に立てるから」という考えに「とてもそう」と答えた割合は、1度も代表になったことがない児童が17%と一番低く、1～2回が21%、何回もが36%と経験が豊富になるにつれて、その割合が上昇していく。

図15 なりたくない時にすいせんされたらどうするか



もちろん、何度も代表になったことがある児童は、集団に対する関わり方が積極的で、人望も厚いなどの個人的な資質に恵まれている面も認められよう。しかし、みんなの代表になる経験を積むことによって、責任感や奉仕の精神が育っていくのもたしかであろう。なにかの代表になって頑張ってみた、そして

なんとかその役割を果たして、みんなもよろこんでくれた。そうした体験が、人のためになにかをする喜びを、教えたのであろう。そう考えると、教師としてさまざまな機会を利用して、より多くの児童にクラスの代表者という経験を積ませることがだいじだと思われる。

図16 クラスの代表になりたい理由

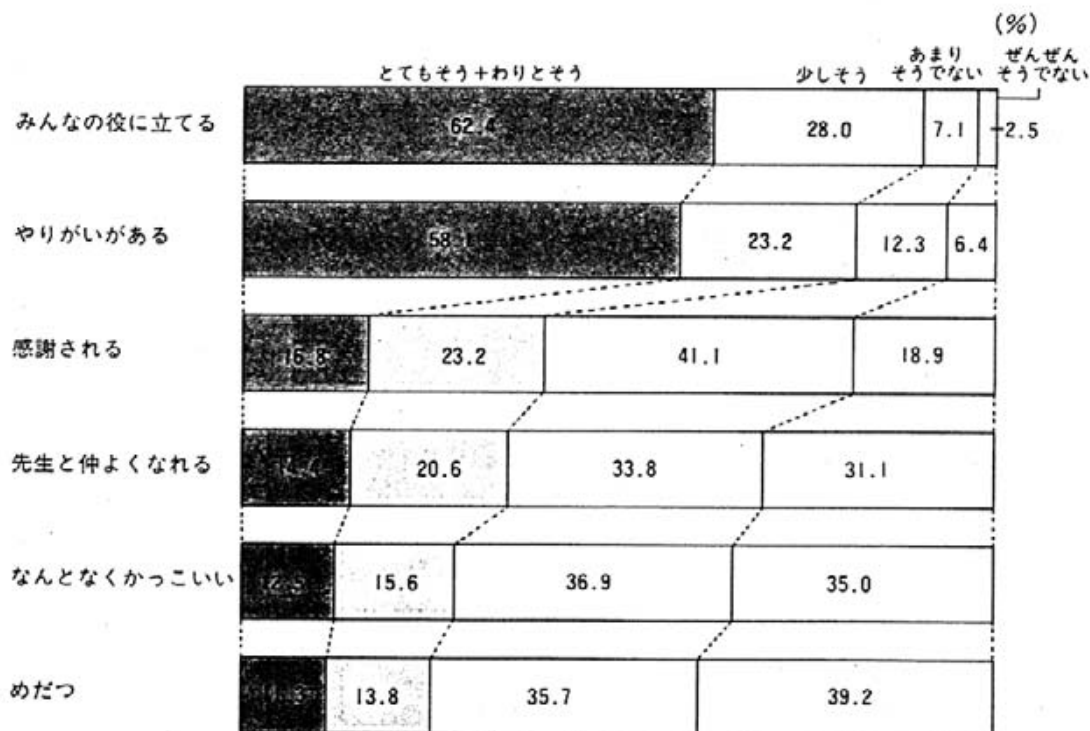


表3 代表になったことがあるか×代表になることへの意識

① 代表になったことがあるか×代表になりたくない理由 (％)

項目 尺度	何回もある		1-2回ある		1度もない	
	何回もある	1-2回ある	1-2回ある	1-2回ある	1度もない	1度もない
めんどくさいから	とてもそう	11.5	<	14.8	<	24.6
	わりとそう	13.5		16.5		15.9
	少しそう	15.4		20.9		22.6
	あまり そうでない	28.8		28.2		26.3
	ぜんぜん そうでない	30.8	>	19.6	>	10.7

② 代表になったことがあるか×代表になりたい理由 (％)

項目 尺度	何回もある		1-2回ある		1度もない	
	何回もある	1-2回ある	1-2回ある	1-2回ある	1度もない	1度もない
みんなの役に立てるから	とてもそう	36.2	>	21.0	>	17.4
	わりとそう	40.0		42.8		36.7
	少しそう	20.0		29.3		30.9
	あまり そうでない	2.8	<	5.7	<	10.6
	ぜんぜん そうでない	1.0		1.2		4.4

3. 民主的態度 —集団とのかかわりの中で—



これまで、子どもたちの話し合いのしかた、代表への意識など、学校生活の中でも、子どもたちの民主的態度や意識を育てる場面、特に学級会活動を中心にして、子どもたちの考え方、行動のしかたについて考察を加えてきた。本章では、それら学校の教育活動がどの

ように影響し、また子どもたちをとりまく社会環境の変化により、どんな考え方をする子どもたちが増えてきているのかを探っていく。そしてさまざまな問題場面を設定しながら、子どもたちの民主的態度について考えてみることにしたい。

民主的意識

子どもたちに自分自身はどんな子かを自己評価してもらった結果のうち、図17は、子どもたちの主体性についてたずねたものである。「人にいろいろとさしずされるのが嫌い」が76%でトップに、「みんなで決めたことはいやでも守る」が65%と続いている。人の言うなりには行動したくないが、集団の決定には、これを十分尊重して行動をとろうと考えているようすがうかがえる。この結果だけを見ると、

個の意志を守りながらも集団の意志を尊重するという、きわめて民主的な態度の持ち主が多い印象を受ける。しかし、続いて見ていくと、自分の意見を発表するのが好きな子は約3割。最後まで自分の考えを主張できる子どもも3割と、集団に対して、自己を主張するのにちゅうちょする者が多いのが目につく。

アメリカなどの子どもと比べ、日本の子は自己主張をしないとと言われる。そうした態度

が欠点ばかりとは言えないが、そうした集団
 の中で弱さは、次の図18にも表れている。
 「自分の意見を相手に伝えられない」「まか

されると何をやっていいのかわからない」と
 いう子が、それぞれ40%近くに達する。さら
 に、「話し合いはめんどうだ」「自分の意見は

図17 集団とのかかわり方(1)

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない
人にさしずされるのは嫌い	34.2	41.4	19.7	4.7
いやだと思ってもきめられたことは必ず守る	12.9	52.3	30.6	4.2
自分の意見を発表するのが好き	12.5	21.4	48.4	17.7
いやだと思ったら、最後まで自分の考えを主張する	9.8	24.0	54.7	11.5

図18 集団とのかかわり方(2)

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない
自由にしろと言われるとどうしてよいかわからない	8.0	32.4	43.0	16.6
自分の意見を言いたくない	9.2	30.7	43.7	16.4
自分の思っていることが伝えられない	8.3	29.6	47.1	15.0
1人や少人数が好き	11.8	21.9	38.2	28.1
話し合いはめんどうくない	7.7	21.3	52.9	18.1
話し合いのとき、友だちの意見をあまり聞いていない	3.2	17.3	60.6	18.9

言いたくない」と、相手とのかかわりを拒否するような態度をみせる子も3分の1程度と、けっして少なくはない。つまり、3割前後と少数派ながら、話し合って決めたりすることをめんどうと考えている子の姿が認められるのが気がかりである。

それらのことを学年別にみたものが、次の図19である。両者に大きな差は認められないが、5年生のほうが「発表は好き」だし、「決められたことは守る」と言うのに対し、6年生になると、「話し合いはめんどうかい」「意見を言いたくない」「自分の考えを伝えられない」という気持ちが逆に強くなっていく。中学校の教師から、子どもたちの話し合いが成立しないという報告をときどき耳にす

るが、この学年差が、中学に行くとそのまま拡大していく傾向にあるのだろうか。

また次の図20は、性差をみたものであるが、女子のほうに「発表が嫌い」「自分の意見を主張しない」といった態度が強くみうけられる。

子どもたちの意見を総合的にみると、「とてもそう」や「まったくない」といった反応が少なく、「わりと、あまり」と、その場の状況に応じて集団に合わせていくという反応が多い。集団の中で孤立したくはないが、そうかといって積極的にかかわろうとしないというのが、今の子どもたちの特徴であると言える。

図19 集団へのかかわり方×学年

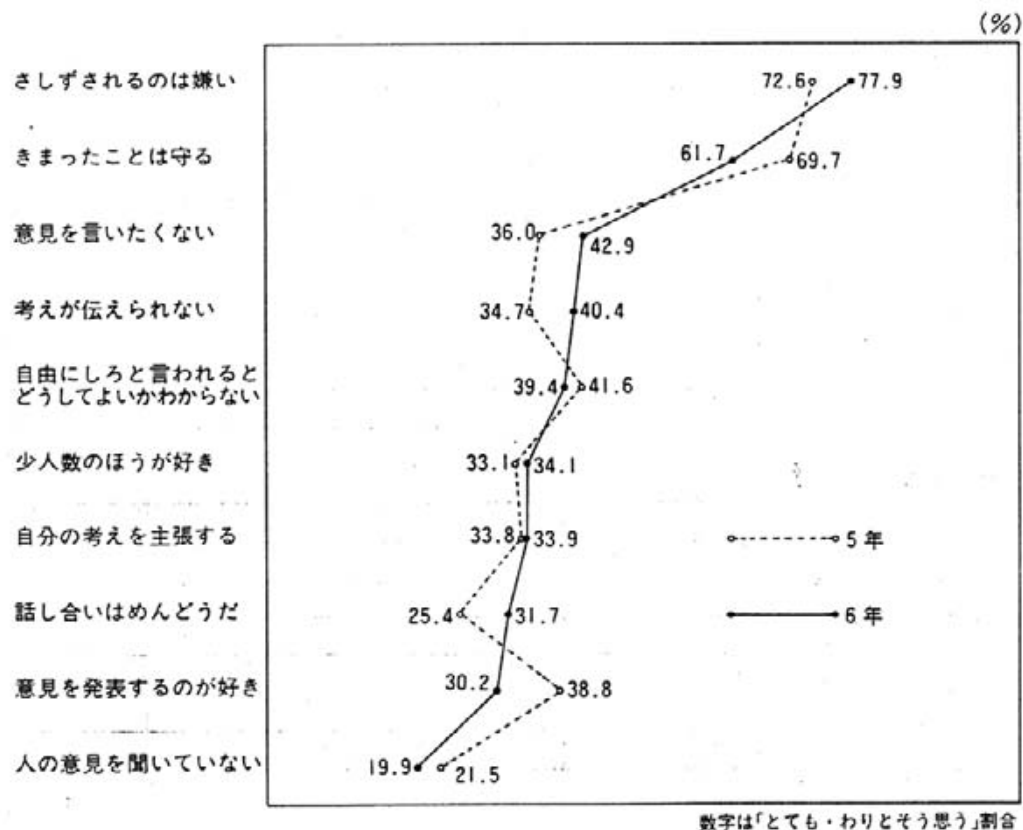
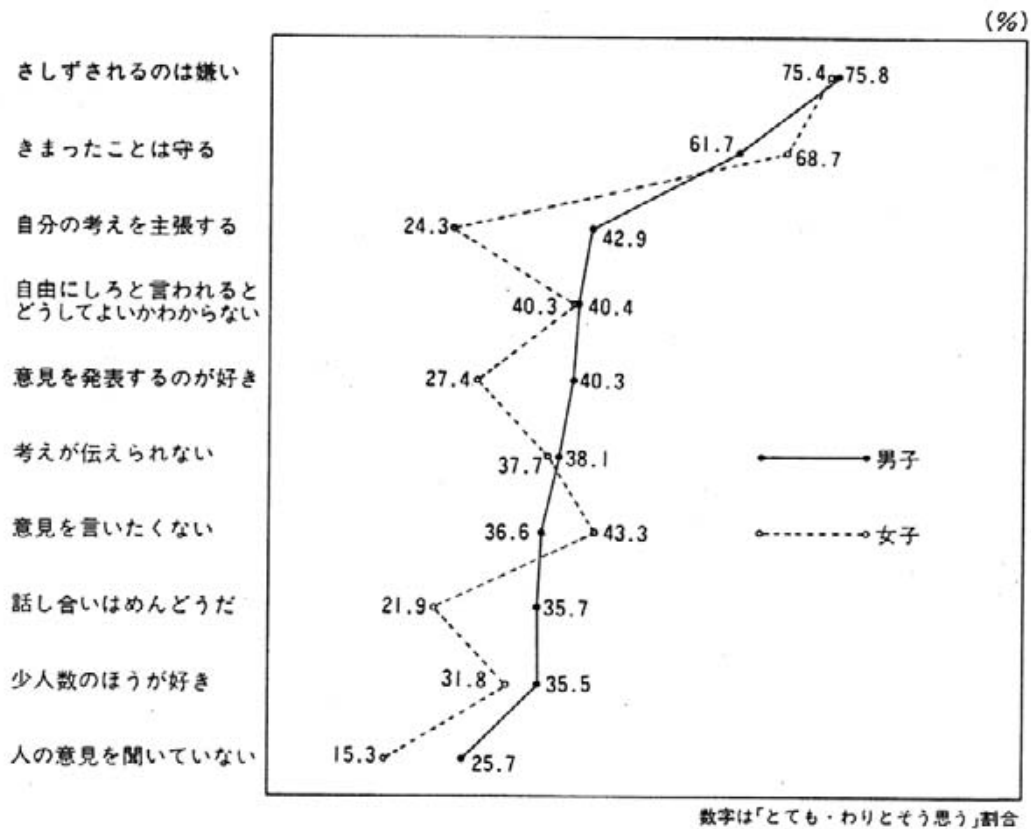


図20 集団とのかかわり方×男女



問題場面での対応

そんな子どもたちが生活している学校の中では、いじめ、自殺など、大きな社会問題としていくつかの報告がなされている。また、その他にも、仲間はずれがあったり、物がなくなってしまうたり、こわされたままになってしまったりと、いろいろな問題もおこっている。

それだけに、子どもたちがさまざまな問題場面で、どんな対応を見せるのか気になるところである。

まず、図21は「図工の授業中いたずらをして、学校の道具をこわしてしまった。その時

どうするか」と、自分の行動に責任をもてるかどうかをたずねた結果である。自分の失敗を素直に反省し、あやまりに行くという児童が約3分の1。その他ほとんどの児童は、「どうしようかと迷い、そしてあやまりに行く」と答えている。さすがに、そのまま放っておこうとするものは5%と少ないが、子どもたちの迷いの部分は少し気にかかるところでもある。

次の図22と図23は、友だちとのかかわりを見たものである。まず図22は、いじめられている子を目撃した場合の対応のしかたである。

助けに行ける子は4分の1。多くの子どもは、「やめろよ」と言うだけにとどまっている。そしてその一方でしらんぷりするもの、自分に関係ないので放っておくというものもそれぞれ1割近くいる。そして次の図23では、友だちの悪口を言っている人に対して、直接かかわりをもつ問題ではないとしても、だま

しよに悪口を言うものも15%いる。

このように見てくると、子どもたちは、問題場面に直面して善悪の判断はできても、自らの積極的な働きかけにはなりにくい。相手に対してのかかわりの薄さを感じとれる結果である。子どもたちの幼いゆえの純粋な感受性、悪者は許さないといった強い正義感が、もっと前面に出されても良いのではないかと感じ

図21 問題場面での選択

「いたづらをして、学校の道具をこわしたとき」

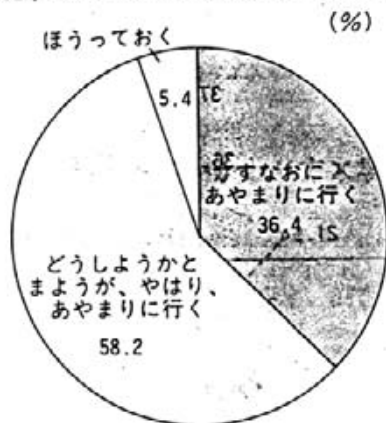
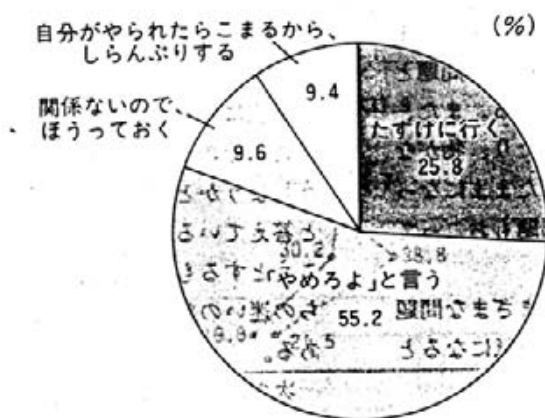


図22 問題場面での選択

「いじめられている子を目撃したとき」



る結果である。

そして、このことを個人のレベルに返して考えてみると、もし本人が、なにかの問題場面に直面した時に、自らの意志で状況を切り拓いていくことができるかどうかと不安を残す結果とも言えよう。たとえば、クラスの友だちが自分を嫌っていると思えてならない時の反応では、図24に示すとおり、なんとか事

態を打開しようというよりは、「がまんする」が約半数であり、「暗く1人でいじける」というものも1割をこす。

さらに、学級会で友だちと意見がくいちがった時には、図25に示すように、自分の考えを最後まで主張できるものは約半数。だまってしまうもの、相手の考えに合わせてしまうものが、残る半数となる。

図23 問題場面での選択

「友だちの悪口を聞いたとき」

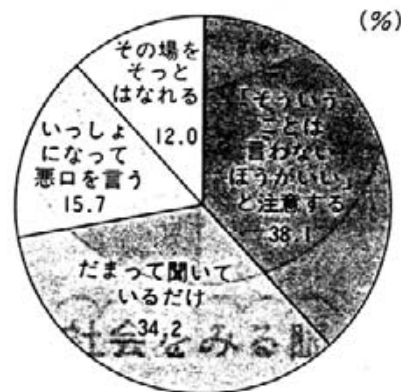
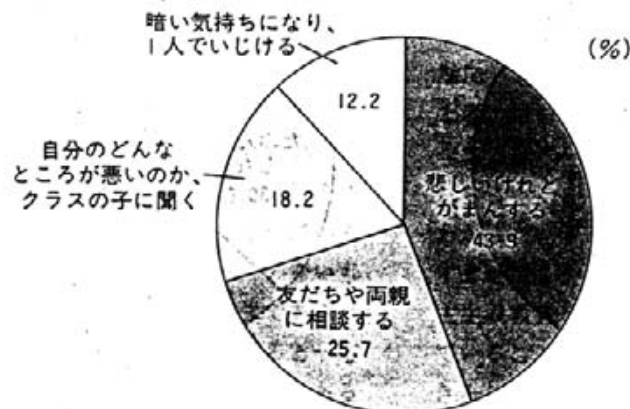


図24 問題場面での選択

「友だちが自分を嫌っていると思ったとき」



最後に、相手が教師であった場合はどうかをみたものが次の図26である。「先生の意見でクラスのことがいつも決まってしまう場合、あなたはどう行動しますか」とたずねた時、「先生に言いに行き、なんとかしようとする」

ものが約6割。あきらめてしまうものが4割となる。問題の設定から、対立は教師1人対クラス全員である。その関係から考えてみると、ややなさけない結果であると言えよう。

図25 問題場面での選択

「学級会で友だちと意見がくいちがったとき」
(%)

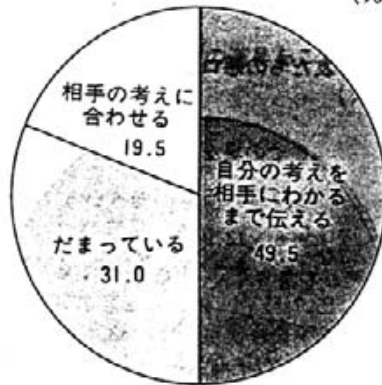
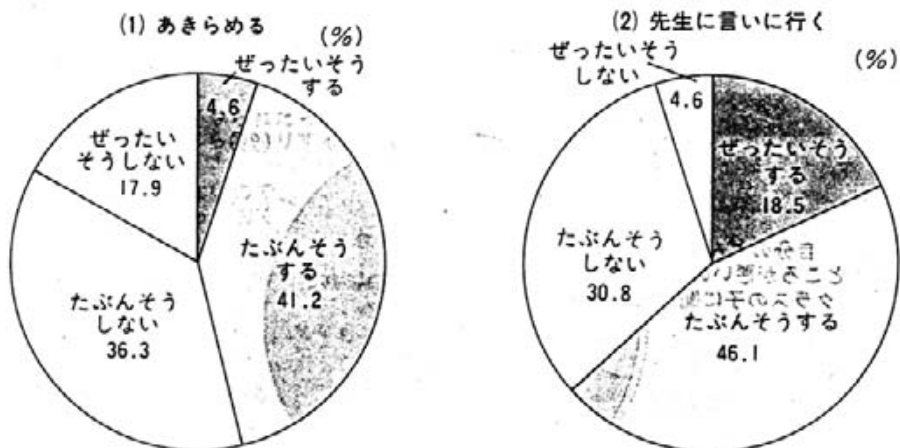


図26 問題場面での選択

「クラスのことが、いつも先生の意見で決まってしまうとき」



4.まとめ



社会をみる眼

図27は、子どもたちが、今のおとな社会をどう評価しているかをみたものである。「選挙の結果は人びとの意見を代表している」と「日本は民主的な国だ」という2項目について、ほぼ同様な数値が示されている。子どもにとってはかなり抽象的な問いなので、イメージとして答えたものであろうが、肯定率は7割に達している。しかし、問題がやや具体化されてくると、「少数の意見でいろいろなことが決まっている」と思うものが4割をこし、「一人ひとりの意見が大切にされているか」については、そう思うものと思わないものが、ちょうど半分半分という結果である。今の世の中について、大きくとらえると一応評価できるが、いろいろな部分で問題もあると指摘しているような結果でもある。

そんな子どもたちの考えは、次の図28の、

今後の日本について予測させたものをみると、より悲観的な様相を示して表されてくる。「とてもそう」と「わりとそう」を合わせた数値でみていくと、「受験勉強が激しさを増す」と「大気汚染や騒音がひどくなる」が75%と、高い不安な数値を示しており、「交通事故の増加」が57%と続き、「戦争がおきるだろう」と考えている子どもも3分の1近くに達する。

この結果を私たちおとなは、どう受けとめたらよいのであろうか。まだ世の中のことがわからない子どもの言うことだからといってすましてしまってよいのだろうか。戦後の民主主義教育が敗戦の苦い体験をもとに出発していることを考えると、前述した「戦争がおきるだろう」と考えている33%の子どもたちの存在は、考えさせられるものを含んでいる。

図27 現代社会に対する評価

	(%)			
	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない
選挙の結果は人々の意見を代表している	17.4	51.5	25.1	6.0
日本は民主的な国だと思う	17.4	46.4	28.2	8.0
日本は一人ひとりの意見が大事にされている国だ	13.3	36.7	40.1	9.9
少数の意見でいろいろなことが決まっている	9.9	32.2	46.1	11.8
国のことはえらい人に決めてもらった方がいい	8.8	19.4	46.5	25.3

図28 日本の社会はようになっていくか

	(%)			
	とても そう	わりと そう	あまり ない	まったく ない
空気のごみや騒音がひどくなっているだろう	35.7	39.6	18.2	
受験勉強が今よりも大変になるだろう	33.4	41.3	21.6	3.7
交通事故がもっと増えるだろう	27.6	35.3	32.8	10.3
日本にも戦争がおきるだろう	10.9	21.6	40.3	27.2
生活が今より苦しくなっているだろう	8.9	22.7	51.2	17.2
食べものが少なくなって自由に買えないだろう	8.5	16.7	51.2	23.6

まとめに代えて

この調査を通して、子どもたちの間に民主的な態度が予想以上にきちんと定着しているのを感じた。自分たちのことは自分で決めたい(図7)や、代表を選ぶ時はまとめる力のある子にしたい(図12)などが支持されているあたりに、子どもたちの健全な感覚が見受けられた。

それだけに、心強い印象を受けたが、そうした中で、クラスの代表になったことのある子が半数以下(図9)という数値が気になりとなった。表3が示したように、代表をやったことのある子は、代表のたいへんさもわかるし、代表の持つだいじさも理解している。そうした意味で、代表を体験することは、民主的な感覚を身につけるための前提条件なのであろう。

しかし半数の子は代表になったことがなく、いつも、決められたことを守るだけの生活を送っている。これでは、良きフォロアーでありえても、頼りになる構成員にはなりえない。

社会心理学に、地位と役割理論という考え方がある。集団の中にいくつかの地位があり、その地位に役割期待がついてまわる。つまり、リーダーの地位にはリーダーとしての期待が寄せられる。そして、リーダーになり始めのころはそうした期待に添えないにしても、そうし

た体験を重ねていくうちに、リーダーらしい行為をとれるようになるという理論である。特に子どもの場合、リーダーになることによって、集団を見通せるようになり、メンバーとしての実力がついてこよう。そして、かりに半数のすべての子がリーダー体験の持ち主ならば、その半数のまとまりが強まろう。

考えてみると、現代の学校では、形式的に班長や児童会の代表を選ぶことはあっても(表1)、日常生活の中で、自分たちでなにかを決め、代表を選んでそれを実行していく体験に乏しい。したがって、子どもたちの感じ方は、たてまえのレベルでとどまっている可能性が強い。

学級花壇を作る、あるいは病気の子を見舞う、そしてプール納会の代表を出す、学級新聞を作る、ファミコンをするときのルールを決める、席順を考えるなど、いろいろのテーマがあろう。折り折りの時に、子どもたちを刺激し、自分たちで自分たちの集団を支えていく機会を与えてほしい。もちろん、すべてがすんなりと進むわけではなかろうが、いろいろの失敗を重ね、みんなで決めていくことのむずかしさがわかる。そうした民主主義についての基本的な体験を積ませることも、学校にとってのだいじな教育のように思われてならない。

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。